ホトトギス

四月号

ホトトギス
昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱承認雑誌第六二七号
平成二十七年四月一日発行（第百十八巻第四号）

俳句随想〔三百九十四〕

汀　子

さまざまな俳句大会が次々開催され、大勢の方々の投句のご負担は如何にも大変であろうと思って久しい。私も選者として次々選句に追われるが、その陰に入選を夢見て良しとする句を投句し、入選しない方も多いのではなかろうか。選者も一生懸命に見て選ぶのであるが、限りなく多い投句から、少しの作品が取り上げられることになり、没として消えていく数は彪大であろう。これはあくまでもイベントであり、入らなくても自分の力不足だからと失望することはない。選句をするのは俳人として長い経験を積んで来たものが携わるのであるが、その選の結果に一喜一憂することはない。この度、選句という観点から私の経験を「ＮＨＫ俳句」に書いて行くことになった。次の四月号から十二回の連載となるが、これまで度々俳句随想で書いてきたことのお復習いになるかと思って俳句随想を纏めたＰＨＰからの新書「俳句入門』を播いて見た。その中の『選句は善意のたまもの』という欄では私の選句の事が述べられてあった。「自分の投句は没になったが、入選句を見るとありふれた句が多く、新し味がないように思う」という感想を頂いたことがある。その人その人の持っている俳句に対する目は作品と同じように個性があって当然である。選者も選者の個性で選をしており、それに合わないからダメというわけではない。「選は悪意でなく善意でもって選ぶべきである」とは年尾の言葉であるが、私もその通りだと思っている。

PDF= 俳誌の salon

句日記　汀子

平成二十六年四月一日　綿業倶楽部

アネモネの赤に集まるはかりごと
やさしさは心の華よ万愚節
結局は本音で話す万愚節
エープリルフールが今日と知りてより

四月五日　芦屋ホトトギス会

桜貝拾へば消ゆる波の音
咲けばすぐ花に浮かるる心あり

四月六日　下萌句会

六甲の山の稜線春の星
足許の菫と気づくまでのこと
ここまでは花の賑はひ届かざる
通り過ぎたるは桜に雨と風

四月七日　ロイヤル俳壇

寒暖に花の遅速を問ふことも
気のつけば日永と思ふ夕べかな
何事も花の遅速に合はせたる
行つてみるまでは語らず花の旅
祝ぎ心よりはじま力ぬ花の旅

四月八日　虚子忌

上木を告ぐる虚子忌となりにけり
花散らす風なき忌日なりしこと

四月十日　清交社

磯遊切上げどきを失ひし
ふつと気の抜けてうららかなりしこと
みよし野の花に詩心授らん
吟行の計画辛夷咲き初めて
明日の旅思ひ朧の月仰ぐ

四月十日　林重尚様

王国に花の心を残さるる
花散つて王国の名を残されし

四月十一日　工業倶楽部

朧夜の訃報諾ひをりしこと
偲ぶ人ありて春宵灯しけり

四月十二日　くつろぎ吉野山

旅衣桜に紛れゆきにけり
一斉に咲きたる花の吉野山
日輪が朧にありて吉野山
花人となりたる自由行動に
花の景つなぎつなぎていざ吉野

第二句会

庭桜宿より洩るる灯に浮かぶ
庭に降りては人朧月
みよし野の花に誘ひて誘はれて
みな庭に降りて紛るる花の闇

四月十三日　くつろぎ吉野山第三句会

みよし野の花より花へ夜明け来し
庭に降り立ちて夜桜朝桜
庭桜より朝の日を置き初むる
なごりあり吉野の桜なほ散らず
今年又落花の渦を見ぬ名残

第四句会

みよし野の花に名残の尽きざるも
くつろぎの吉野の花に名残あり
花の旅家路につなぎをりにけり

四月十五日　有恒俳句会

みよし野の旅終へしこと朧なる
最高の花見となりぬ吉野山
一茎のアネモネとして君臨す
ふり返り惜しむ帰路あり花朧
朧夜の切りたくなくて長電話
咲き満ちて落花の風情待つことも

四月十五日　無名会

亀鳴くと宿下駄の音ひそめけり
庭桜よりつながつて吉野山
みよし野の桜は散るを忘れしか
山路ゆく桜ならざるなき吉野
咲けば散る桜の命旬日に
みよし野の桜に呼ばれゐる如く

四月十六日　夏潮句会

みよし野の花の余韻を引く家居
今日あたり落花の包む吉野山
囀の名残となりぬ家路かな
展示せる句仏の書簡花の館
花の旅終りし心地よき疲れ
二階にもしだれ桜でありしかな
春惜む庭の中心なかりけり

四月二十一日　大阪倶楽部

蝌蚪群るるとて知られたる通学路
散るものは散りて一面若緑
予定立て難き事情が春愁に
春愁に縁なき仕事抱へをり
稿債を減らし春愁消えてをり
花終へし吉野の宿に名残あり

四月二十四日　きさらぎ会

みよし野の旅も名残よ花曇
筆箱の整理終へたる花曇
うららかな旅路ハンドル迷ひなく
花曇吉野に残し来し心

四月二十五日　時雨句会

蝌蚪生れて大地やうやくゆるみそむ
蜃気楼消えてやうやくその辺り
みよし野の花の絵巻の遠ざかる
掛餅の水とはもう言へぬ覗きけり
みよし野の花のその後を知らざりし
朝の風纏ひはじめしチューリップ

四月二十六日　句会と講演の会

やうやくにととのふ日差春は行く
よく晴れて春を惜むといふ一日
行春やもう返らざる吉野山
東京の滞在半ば春惜む

四月二十八日　ホトトギス社吟行会

記憶より小さき句碑よ暖かし
除幕せし日を恋ふは春惜むこと
武蔵野を統べし社に春惜む

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十六年四月二日　カトリック新聞選者吟

四旬節迎へ広ごる雪のひま

四月三日　蕉心会

人生の踏んばりどころ亀鳴けり
鎌倉へ花の見頃を繋ぐ雨
落花てふ風の輪郭ありにけり
春の空そんな泣かへんでもええやん
これは私が付けて来た花屑や
落椿水面を終の褥とし
これまでの花これよりの落花かな

四月五日　芦屋ホトトギス会

東京は落花芦屋は満開に
和田は何考へとんねん春の暮
桜貝昔浜辺でありし頃

四月六日　野分会吾屋例会

沈丁の香りは過去を閉ぢ込めて
沈丁の香に万物の動かざる
亀鳴くや百歳までは健やかに

四月六日　虚子記念文学館投句

亀鳴くや軍艦島といふ遺産

四月八日　虚子忌

落花舞ふ忌日の空を奏でつつ

四月十日　土筆会

風光る都心のビルの底の底
遠蛙この山を売る話など
一片に誘はれたる落花急

四月十二、十三日　吉野くつろぎの旅

ひとひらの落花ためらひながら舞ふ
花見茶屋日当りながら朽ちゆけり
花の雲貫いてゆく花の雲
絶景の花に溺れてゆく視界
朧月吉野の招く一過客
花も又枝の主日の昂りに
この花の明日は如何にと佇みぬ
一片も散らぬ桜の疎ましく
花の精時を止めたる吉野山
落花待つとは来年を待つ心

四月十四日　角川「俳句」近詠

輪郭を宙に留めて桜かな
鶯の声に一片散りゆけり
花の雲眼下に溺れゆきにけり
みよし野の花人花になり切つて

四月十四日　朝日カルチャー若草句会

チューリップ日を恋ふ五十センチかな
莱の花の黄とは羽音の紛れ易
蝶の昼数多の花の香に酔うて
春の空都庁圧されてをりにけり
咲くものの色皆春の空に溶け

四月十五日　むさし野吟行会

みよし野にむさし野に春惜みけり
桜蘂降るむさし野の風に触れ
山吹の白に集まる加須の風
咲くものの色に迷うてをりし蝶

四月十七日　北國文芸選者吟

数多咲くものを揺さぶり風光る

四月十七日　登高会

その後の吉野は如何に暮かぬる
子雀の人を人とも思はぬ目
米粒に転がつて来し雀の子
今日は西明日は東へ日永旅
抽んでて指揮者のやうな葱坊主

四月十八日　安澤阿彌様句碑披き祝句

薫風や永久に絵心一詩心

四月二十二日　若水句会

桜鯛刺身嫌ひも今日だけは
誌齢祝ぐ復活祭となりにけり
燕の巣駅長忙しくなりぬ
燕の巣神代の風を受けながら
祝ぎ心もて桜鯛耀られゆく
イースター鳥と会話をする司祭

四月二十三日　目黒学園句会

杉の花終れば檜てふ修羅場
小児科に泣き顔集め種痘かな
行春や今年も吉野訪へしこと
杉の花蔵王堂より九十九折
満開の杉の花とは疎まれて
行春ややり残したること多し

四月二十五日　俳句四季「一枚の絵」

システィーナ礼拝堂に亀鳴けり

四月二十六日　ホトトギス社句会

遠足の列を崩せし羽音かな
行春や選句の後の赤ワイン
行春や結婚三十二年目に

四月二十七日　野分会東京例会

亀鳴くや主宰就任六ヶ月
タイガース快進撃に亀鳴けり

四月二十八日　ホトトギス社吟行会

参道の長さに新樹明りかな
春惜む句碑に集へる虚子門下

雑詠

廣太郎　選

話合ひ終へて漸くおでんかな　松本　唐澤春城
代り映えも改造もなき年の暮　同　同
冬木立また来年に賭けるかな　同　同
田村元逝き永田町冬めける　東京　大久保白村
田村元偲ぶ議事堂帰り花　同　同
お別れの会や師走の選挙中　同　同
古城址や赤土深く地虫鳴く　横手　伊藤とほ歩
安らぎの色となりたる樵黄葉　同　同
滝見上げをるを見下ろしをりにけり　同　同
枯木宿裏へまはれば信濃川　長岡　安原　葉
何も彼も兄のお下がり青写真　同　同
アスリート応援もみな息白し　同　同
西行の秋思を歌にたづねけり　福山　竹下陶子
べらばうな音を放ちし威銃　同　同
夜神楽は石見の文化うま酒も　同　同
みよしのの山湧き上がる花の色　東京　今井肖子
山桜なだるゝ底の水の音　同　同
ほんたうの桜の色を重ね合ふ　同　同

ベンチ立つきつかけとなる桐一葉　周南　小川龍雄
雨止みて突然襲ひ来る残暑　同　同
稲妻の近付く気配なかりけり　神戸　山田佳乃
秋高し櫂の削ぎゆく川の色　同　同
凩に吹かれ影まで奪はれし　同　同
行秋を刻むロビーの古時計　同　涌羅由美
飛火野の神の留守守る森の精　同　同
目より耳動きて鹿の好奇心　同　同
まほろばの千の彩なす紅葉かな　奈良　古賀しぐれ
海日和六甲日和七五三奈　同　同
ノーベル賞候補ぞろぞろ七五三　同　同
シンデレラボーイとガール七五三　神戸　立村霜衣
日本の大和の奈良のここに露　同　同
解きゆくごとく炭火を育てゆく　同　藤井啓子
鯨漁語りつ目差しは沖へ　同　同
誉められて誉められて菊輝けり　同　同
東大に門の名いくつ銀杏散る　相模原　木村享史
模擬試験わが鉛筆の神は旅　同　同
朝富士の初雪化粧して現れし　同　同
頬杖を突かれし虚子の秋思とは　東京　橋本くに彦
蚯蚓鳴くこの地のどこか火噴く山　同　同
色使ひ尽せし銀杏落葉かな　同　同
かさこそと日の香かさこそ大枯野　同　同
新海苔のちよいと出されし酒の当て

PDF= 俳誌の salon

雑詠句評（三月号より）

中　正・とほ歩・美　奇
静　龍・眞理子・肖　子
葉　　・保　佳・むつみ
廣太郎

どの道も史跡に尽くる紅葉狩　奈良　古賀しぐれ

この句は、「どの道も」で歩き始めて、次々と晩秋の美しい景色がひろがる構造になっている。秋天の青空の下、地には刈田、遠近に美しい紅葉の木々の景が広がっていく。そして散策の最後に行き着くのが、史跡。ここは古都・奈良。町の至る所に名所旧跡があって、絢爛たる紅葉に彩られて、今新たに歴史がよみがえる。

「どの道も」と弾むように詠み出して、「史跡に尽くる」と展開して断言し、最後に「紅葉狩」と一気に華やかに終る。この一句のリズムも、まるで美しい歴史絵巻のようである。作者の美意識と、自分の町への誇りが垣間見える一句である。（中正）

作者の地名から想像すると、やはり奈良の風景だろうか。どの道を歩いても、歴史的建造物に行き当る確率は非常に高いだろう。そんな古き良き時代の風情を楽しみながら「紅葉狩」も楽しんでいる姿が、何とも羨ましい限りである。歴史の重みと、自然の偉大さが大きな景として迫ってくる。（廣太郎）

野に人等立ちて黙祷そぞろ寒　長岡　安原　葉

天変地異、異常気象、噴火、地震。いつ、どこで遭遇するか判らないのが現実である。特に今年は、その感が強い一年であった。

災害があって、その際、命を落とされた人の、ご冥福を祈って……と云う事が思われる。

その想いを、そぞろ寒という季題に託された心情の深い句である。（とほ歩）

ここ数十年、日本列島には何度かの自然災害が起こり、多くの人命が失われた事はどなたも御存知で、地震や、火山の噴火等、これからも起こる可能性が指摘されている。作者も先年の新潟地震で被災された御一人であり、その追悼の場面だろう。季題を通して、追悼の心が伝わってくる。（廣太郎）

PDF= 俳誌の salon

天地有情

六子選

葬りのすみし放心十三夜　相模原　木村享史
喪の旅の帰りは遠し後の月　同　同
若水や八十歳を七つ超す　東京　今井千鶴子
年の内には我が部屋に帰りたし　同　同
鷹現れしかと思ふ間に急降下　長岡　安原葉
点々とつづき現れ鷹渡る　同　同
金魚てふ自由人間てふ不自由　東京　稲畑廣太郎
時計草蟻秒針になり切つて　同　同
冬めくやそれも励みとしたる日々　龍ヶ崎　今橋眞理子
北国の林檎明りと言へるほど　同　同
海の紺より旋回の鷹消ゆる　東京　河野美奇
旋回の鷹に吸はれてゆべ視線　同　同
彗星のよぎり夜明けの枯野かな　同　橋本くに彦
日に風に色の引き算紅葉散る　同　同
石あれば文字あれば足とめて秋　熊本　岩岡中正
神留守の妻も留守なる一日かな　同　同
水団扇長良遠しと思ひつつ　神戸　後藤比奈夫
型録の鰻重大き鰻の日　同　同

色曳きて光を曳きて柿落葉東京岩村恵子　東京　岩村恵子
午後二時の日差し斜めや冬めきて　福山　竹下陶子
菖蒲湯に卒寿の命沈めけり　同　同
みちのくの湖を昏めてしぐれけり　東京　山田閏子
力得し星の輝き冬めける　同　同
蓮根掘る泥の抵抗無抵抗　同　大久保白村
飛火野に我も一顆の露となる　香川　湯川雅
冬の海見て来し無口なりしかな　同　同
神農の虎の新地に顔が利く　神戸　後藤立夫
神農の虎の重心虎にあり　同　同
坐ること多くなりしよ日短　群馬　中杉隆世
冬山の高からねども大いなる　同　同
み吉野を咲き尽くしたる山桜　東京　今井肖子
明日には花散り渡る谷ならむ　同　同
オリオンを引つかけてゐる枯木かな　神戸　後藤比奈夫
湯豆腐に夫婦やうやく老いむとす　同　同

PDF= 俳誌の salon

京極杞陽展

稲畑汀子

虚子記念文学館の秋から来年春までの展示は「京極杞陽展」である。但馬の豊岡の城主で虚子の弟子である京極杞陽さんの展示は大勢の方々に待たれたものであった。私も全て縁のものは記念館に渡してあるので、久しぶりに杞陽さんとお会い出来るような懐かしい思いを抱いていた。

「私は何となく京極杞陽さんという人に魅力を感じています」

朝日俳壇の選句会のときに金子兜太さんがぼろっと言つたのを私は聞き逃してはいなかった。

「素晴らしい方ですよ。大変個性的な俳句を作られて「私も大変親しくして居りました」

「へえ！」

「今、虚子記念文学館の展示で京極杞陽さんの展示会をしています。今度、関西の朝日俳壇選者の会で西下される時に足を伸ばされたらいかがですか」

その日、十月の最後の金曜日の前後、他の方々にも声を掛けた。俳壇担当の宇佐美さんは朝日カルチャーの後、観に来ると約束が出来た。二転三転して、金子さんは前日から大阪に泊まられることになっていたので前日に観に来られることになった。

「じゃあ、大阪へ戻られるときは私の車でお送りしましょう」

案の定、

「怖いから嫌だよ。ははははは」

とお断りになった。

「朝日俳壇選者と共に」の前日は一日予定が無かった。

虚子記念文学館には、もし金子さんが見えたら電話をくれるように頼んでおいた。

「金子さんが見えました」

早々と電話が掛かってきた。私は取り敢えず庭木戸を開けて、記念館の談話室から中に入った。

「今もう特別展示室へ行かれています」

「あら、そう」

私もエレベーターに乗って二階の展示室に向った。

「まあ、随分お早いですね。ようこそいらっしゃいました」

ご令息に付き添われた九十五歳の金子さんは特別展示室で京極杞陽展を観ておられた。

「僕が考えていた風貌とは少し違うなあ」

「杞陽さんはすごくハンサムよ。ここの写真は皆昔の若い頃のだから、私もこんなにスマートでしょ」

「え？これがあんたですか」

「そうそう。若い頃、虚子と共に旅をした写真なのよ」
何とも興味深々な金子さんに次々説明して行った。
「お茶を差し上げますから我が家へいらして下さい」
「うん、そうするよ」
「転ばないでよ」
応接間に案内すると、金子さんはほっと寛いだ表情になった。
「ところで、あんたが落ちた廊下の穴を見せて貰えるかな?」
「へえ?お目にかけますよ。こちらへどうぞ」
廊下の絨毯を捲って、私が落ちた穴は壁際に寄せて作りなおしたことを説明しながら、蓋を開けた。
「うへー。こんな高さから落ちたのか」
「そうよ」
「それで腕だけで済んだなんて、あんたはよっぽど石頭だな。よく助かったものだ」
「そうでしょ。どうせ石頭ですよ。金子さん、その梯子で下へお降りになる?」
「いや、ごめんだ、ごめんだ」
「この下は書庫になっていて、直ぐに使わない本が入っているのよ。この手すりを持ってお入りになったら」
「いや、もういい、もういい」
少し休憩された後、私が送るとお誘いした車に素直に乗られ、金子さん親子は今宵お泊まりの大阪のホテルへ向かわれた。
「怖いですか?」
「いやあ、眠くなってきた」